当院における漢方診療の実際

大学病院における漢方診療の実際とこれから

聖マリアンナ医科大学 産婦人科学 講師/大学病院 産科副部長 五十嵐 豪（すぐる） 先生

2002年　聖マリアンナ医科大学卒業、同大学病院 研修医（産婦人科）
2008年　聖マリアンナ医科大学 大学病院 診療助手
2009年　聖マリアンナ医科大学 大学院博士課程 修了
同　年　聖マリアンナ医科大学 産婦人科学 助教、
同大学医学部附属大学病院 産科医長
2013年　聖マリアンナ医科大学 産婦人科学 講師/
同大学医学部附属大学病院 産科副部長

2013年に早発閉経患者さんの出産に世界で初めて成功し、「がん・生殖医療」という新たな分野でも世界初の先進医療を行っている聖マリアンナ医科大学病院 産婦人科には、各方面から熱い視線が送られている。産婦人科学講師としてご活躍の五十嵐豪先生は、周産期・生殖・女性医学にまたがる幅広い診療の中で漢方治療にも力を注いでおられる。「大学でやりたいことが山積しています」とおっしゃる五十嵐先生に、大学病院における漢方診療の実際とこれからの漢方の発展に向けての抱負を語っていただいた。

聖マリアンナ医科大学・病院の特徴

敬虔なカトリック信者である明石嘉聞先生によって1971年に創立した本学は、その名のとおり「キリスト教的人類愛に基づく生命の尊厳」を基調とした医師の養成を建学の精神に掲げています。つまり、医師として驕り高ぶることなく、苦しんでいるすべての人に手を差し伸べることを基本に医療を行うという理念が根底にあります。

教育面では、生命の尊厳を守ることができる良医の育成を目指し、大学病院を含めた附属4病院で多岐・多様な臨床実習ができることや、各種のシミュレーションキットを用いた手技・技術が体験できるなど、設備や体制が充実しています。

医療面においては、各附属病院が地域の中核病院として近隣の医療機関との連携を強力に推進し、地域の皆様に良質な医療を提供しています。

充実した産婦人科の四本柱

産婦人科には、「周産期」、「腫瘍」、「生殖医療」、「女性医学」という四本の柱がありますが、当科はそのいずれの柱も充実しています。

「周産期」に関しては、大学病院と横浜市西部病院に周産期の医療センターが併設されるというように、1大学で2つの周産期専門のセンターを有しています。「腫瘍」に関しては、子宮頸がん・子宮体がんや卵巣がんなどの婦人科がんの手術件数も、神奈川県内でも少ない方ではなく、他診療科とも連携して集学的治療や緩和医療も提供できる体制が整備されています。

「生殖医療」に関しては、石塚文平前教授が早発卵巣不全患者さんの治療に長年尽力されていましたが、数年前にスタンフォード大学との共同研究がスタートして新たな命が誕生しました。これは、患者さんの卵巣を摘出して組織を凍結保存し、特殊な技術による培養後に移植するという技術を用いています。さらに、鈴木直教授が『がん・生殖医療』という医療をわが国の中心となって推進され、その成果に期待が寄せられています。

「女性医学」に関しては、『アゼリア外来』を開設し、更年期女性を中心に女性のQOL向上を目指したトータルケアを行っています。この名称は、更年期という時期を上手く乗り切って、さらに花を開くという意味で、石塚前教授が命名されました。

当科の四本柱には垣根がなく、教室員は自由にしかも複数を選ぶことができます。実際に私も、腫瘍以外はすべてを担当していますし、まだ専門が決まっていない若い先生はどこでも学べる環境が整っていますので、意欲的な先生には非常に魅力的と言えます。

産後浮腫の必須処方 －柴苓湯－

当科の診療において漢方薬は欠かせません。たとえばアゼリア外来では、産婦人科の三大処方である当帰芍薬散、加味逍遙散、桂枝茯苓丸を中心に20種類以上の処方が用いられています。

周産期では、患者さんからのご希望もあって風邪薬などを処方していますが、もう一つ欠かせない処方が柴苓湯です。柴苓湯は不育症の治療にも用いますが、妊娠期間中でも安心して使用できる、使い勝手が良い処方というイメージがあります。また、産後浮腫に処方すると、服用開始数日で尿量が増加して明らかな改善を実感します。分娩翌日から足がむくんで痛みがある方には必ず柴苓湯を処方しますが、退院前には浮腫も消褪しますし、ご希望があれば退院処方にも組み入れています。

月経前症候群に加味逍遙散が著効

現在私も約20種類の漢方処方を用いています。当院で使用できる処方には限りがありますが、患者さんは女性に限られ、訴えもある程度は共通していますから、妊婦さんの処方、更年期女性の処方、さらに精神的な要素が加わった際の処方などの「引き出し」の中から処方を選択し、患者さんにもご満足いただいています(**表**)。

たとえば、30歳代で月経前にイライラが高じてご家族やお子さんにもあたるような月経前症候群の患者さんに加味逍遙散を処方したところ、約3ヵ月後には症状が改善し、しかも月経痛も改善したという症例を経験しました。

表　聖マリアンナ医科大学病院 産婦人科で用いられる主な漢方処方

妊婦の汎用処方	小青竜湯、大建中湯、当帰芍薬散、五苓散、柴苓湯、麦門冬湯、葛根湯(乳腺炎)
更年期患者の汎用処方	当帰芍薬散、加味逍遙散、桂枝茯苓丸、潤腸湯、抑肝散、補中益気湯、十全大補湯、釣藤散、牛車腎気丸、桂枝加竜骨牡蛎湯、柴胡加竜骨牡蛎湯
不妊治療の汎用処方	温経湯 (男性)八味地黄丸、補中益気湯

このような患者さんは西洋医学では治療困難例であり、漢方薬だからこそ効果が得られたのだと思います。

漢方を発展させるために

現在の医療においてはエビデンスが重要視され、それに基づいてガイドラインが策定されていますが、その反面でエビデンスが不十分な治療法や治療薬は否定的に見られる傾向にあります。残念ながら、その一つが漢方薬です。

もちろん、漢方薬も基礎・臨床の検討が積極的になされており、エビデンスがあることに間違いありません。しかし、「証」に従って処方を選択するために「エビデンスを作ることはできない」、という批判の声もあります。患者さんの状態の変化に応じて処方を選択することに漢方治療の面白さがありますが、西洋薬と同様のエビデンスがないとガイドラインにそぐわないと軽視されてしまうことが危惧されます。今までは経験によって漢方の考え方や技術が伝えられてきましたが、これからは個々の症例を蓄積し、エビデンスとしてまとめるための臨床研究と、それを裏付ける基礎試験も必要です。

また教育の面においても、産婦人科だけに限らず次の世代の先生に、正しく漢方が伝承されるよう努力を続けたいと思っています。大学の人間の一人として、漢方が発展するためにやりたいことが山積しています。